

이었다。鞍山附近でやっと客車の中に入ることができた。ソ連兵が、ときどき乗車し日本人を連れ出した。私達は帽子を深くして満人の隣で、じっとしていた。通化から大連まで七四〇キロぐらい懸命に逃げたのです。

大連に帰ると会社の人達が「まあ、よく早く帰ってよかった」と喜んできてくれた。酒を飲んで二日間、ぐっと寝ることができた。

ソ連兵は、すでに大連に入っていた。夜は銃声の音で、とても出ることはできなかった。中国政府の布告が街に出された『器物を破棄した者は重罪を処する』だった。

メリヤス会社の社長から、若し暴動で工場が破壊されると責任者が逮捕されるから直ぐ工場へ行ってもらいたい。とたのまれ沙河口から二里程離れた田舎の馬欄屯に出かけた。工場には日本人の従業員の男女子供が七人、不安そうにしていた。私が行くと喜んだ。

その晩、暴動がはじまった。男女老人、子供、数百人が青竜刀や金物をガンガンやって大声を出して工場に入ってきた。棒を持っていたが、多数の中に巻きこまれ危険になった。二時間ぐらいでメリヤス製品や綿糸をはじめ

機械にかけた糸まで全部盗られ家屋や機械は、ばらばらに破損された。命があったことをよかったと思った。それから政府から工場の没収の通知書がきた。社長は真っ青になった。私は責任者として被服部に出て実在を報告し、有るものを全部出した。部長は止むをえないと言って会社への責任の追及はしなかった。

しかし困ったことは、兵隊に行くとき、空襲を防ぐため私財を全部工場に置き、暴動に全部盗られ、着ている支那服だけで裸になったことでした。それから引揚げするまで二年間、妻と一緒に苦しい生活がはじまりました。

従軍看護婦としての体験記

群馬県 藤 井 芳 子

私は、太平洋戦争に従軍看護婦として参加し、戦中、戦後を通して悲惨な生活を余儀なくされた一人であります。

終戦から四十周年を経た今日、今や日本は世界の経済大国として平和に繁栄しています。恐ろしいことと思うのは、平和と繁栄に馴れてうかつにもあの戦争の惨禍を忘れうすらいでいることではないかと思えます。

戦争は人類最大の罪悪なのですが、人類が生存する限り、その民俗の持つ思想や経済などから、避けることのできないような悲しい宿命も持っているのだろうと考えております。

昭和十六年九月、戦争に役立つ金属を生活物資の中から鉄、銅、ニッケルなどや、お寺では鐘まで軍器製造のため供出しました。当時、私たちの脳裏には何があるんですか、お国のために尽力する教育がすっかりされ、刻み込まれておりました。

戦争たけなわの昭和十八年五月、私は看護婦資格を取得し従軍看護婦として、満州第八十九部隊に従軍しました。戦争で犠牲になった傷病兵のために一生懸命看護していました。昭和二十年八月、日本の無条件降伏の月でした。私は、部隊の一室で親もとに送る「遺書」を書いておりました。私は、この日ですら主に開拓団の避難民の人

達の悲惨な実態を見、戦傷の兵士の看護をしましたが、今後二度と戦争の砲火の中に身をさらすことのないようにとの悲願から、これから結婚をして子供を育てる人達のためにと真剣に考え書きつづります。

満州第八十九部隊は、南満州鉄峯市にありました。日露戦争後の軍部であり、関東軍糧秣支所、関東軍兵器支廠等があった関係上大暴徒の来襲、掠奪、暴行、ソ連軍の発砲により相ついで死傷者がました。

昭和二十年十二月に入り、この部隊はわずか一週間のうちに三つの難問題に直面しました。十二月二日夜半のことです。一人の上等兵が誰かに頸を切り落とされたのです。私は誰が「殺せ」と命令したか、誰が殺すために刀を振り上げたか知りません。

この部隊に八路軍司令部の兵十が怪我で入院しておりました。その兵士は中国語の話せる日本人看護婦に結婚を強要したのです。その看護婦は、とっさに「私は某上等兵との結婚の約束があります。」と断りました。八路軍の兵士は「某上等兵を殺す」と言い、某上等兵も「俺が八路兵を殺してやる」と言うことになりました。戦勝

国の兵士をたとえ一人殺しても、日本人全体におよぼす影響が大きいことを察知した将校が、断腸の思いで部下に「某上等兵を殺せ」の命令が降されたと思います。

その後日本人は危険だということになり私物検査で刃物は取り上げられました。医療器具、物品に赤札をはりつけ使用不能になりました。十二月九日、七百人の患者は、市内外の倉庫や旧ホテル跡に収容され、医師や看護婦は八路軍に徴用された。私たちは若干の医師や看護婦をおき、八路軍について、国府軍と八路軍の交戦場へ行きました。つらいつらい西へ西への移動になり何カ月も行軍が続きました。氷点下二十八度前後で、食料も不足がちで、高粱や粟がゆを少し食べて、やっと歩いてきた毎日でした。夜は野宿したり馬小屋同然のところ、高粱や粟がらを敷きや々と眠ることにしました。

厳寒のさなか、毎日毎日降雪のため困難な行軍が続ききました。大車を調達し乗車が許されましたが、馬車には十分間とも乗っていられません。それは凍傷になって歩行不能となると大変だからです。山路にかかると短い冬の陽は西の端に近く、すでに凍りつき始めて、

人家もない山また山を歩きつづけた。歩行困難になった仲間を励ましながらくち夜中の十時頃燈影を見つけた時は、しばらく我が眼が信じられませんでした。疲れ切った一行からは声も出ないありさまでした。

行軍中、遠方より大砲の音を聞きながら逃避行をつづけましたが、年月も忘却し定かな月日ではないが、昭和二十五年春頃南下し、衛生部もまとまり大きくなって、錦州市「元日本赤十字病院」に集結しました。

この病院は、省立病院になり勤務を続行することになりました。昭和二十五年秋頃、幸いにも、国府軍と八路軍との抗戦は終わり、軍服から白衣の医療従事者となりました。

昭和二十八年五月まで、勤務しておりましたが、日中友好協会の支援でようやく夢にまで見ていた故郷日本に帰国できることになりました。敗戦国日本は、私が想像していたより国民の力で着実な復興をしているのは驚きでした。東京の大戦災があったのが嘘のように戦中の時よりも美しく整備された道路や街路樹等の緑は、まさに平和な国日本、経済力向上の日本という感じがしまし

た。

無事帰国できたことは本当にありがたいことで、心から感謝いたしております。

戦争による悲しい出来事は、永遠に消滅することはないでしょう。不幸にして、彼の地において亡くなられた多くの霊に安らかにと心よりご冥福をお祈りしつつ、この体験記を書かせていただきました。

満鉄社員時代引揚迄の思い出

静岡県 石井 光 兼

昭和十一年二月二十六日お堀端にある第一生命の変電所に勤務して居りました。朝早くから小雪の降るなか銃声が聞こえるので、屋上の物かげから見降すと、二二六事件でした。事件も終り、四月下旬夕方方らりと神田橋の方に行くとき大勢の人が職業安定所の前に居るのでよく見ると職種別に筆太で満鉄の大募集、早速小生も応じ、狸穴の総裁官舎で試験があり、受験者四千人位でした。

幸い合格したので、飯田橋の安定所で仕度金二百円もらい都の第二助役に引卒され、神戸より乗船、門司で九州の人と合流し、大連港に上陸、大連電気区に入社、毎日仕事を忙しく過して居りました。処十六年八月瓦房店電気区に転勤致しました。其の秋、官祭に角力があると云うので昼休の話の最中、北支出張よりかえった、通信係の催と云う満人で二、〇六メートル位、体重一〇一キロ位の大男に、通信信号の若い人達が催に角力をむりやりやらされて問題にならないので馬鹿にされて居るのを見兼ね、いちばん小男の私が相手と出たら、本人も見入る人達も、うす笑いでした。右一本背負で、やっといっほどたたきつけました。それより日本人には角力をとろうといわなくなりました。真夏のある日、仕事からかえると午后、満鉄会館で俳句の教室で、安藤十穂跟先生がお出になるから全員出席の電話で私も参加いたしました。先生は見た物、聞いたもの、凡て五七五の十七文字に作ればよいと言われたので、其の日の仕事、電線のタルミ取りをやってきたので、「電線のリップに見ゆる暑さかな」と書いてリップとは仕事上の言葉で通常はタルミ